

## 運命的な 2 年間

第 5 期生 加藤 絵美

2007 年春、私は運命的な出会いをした。そして、その出会いからもうすぐ 2 年が過ぎようとしている。私はその運命的な 2 年間で振り返って、今まさにこの瞬間、このページに言葉を残そうとしている。何を残そうかあれこれ思いを巡らせすぎて、何が何だかよくわからないというのが正直なところだが、とにかく、感じたことをありのままに、自分の言葉で、この 1 ページという少ない空間に残していきたいと思う。

小野先生との出会いは、私にとって本当に運命的で衝撃的だった。私がこんなことを言うのもあれだが、先生は私たちに対して最初から最後まで本気だった。私は、先生ほど本気で学生と何かを創り出そうとしている人に出会ったことがなかったから、ただ単純に感動した。私以外の 5 期がどういう気持ちで課題やケース、ディベートや論文に取り組んでいたかはわからないが、少なくとも私は、その先生の本気に絶対に応えたい、応えなきゃならないという気持ちでいっぱいだった。結果、応えられたかといったら自信はないのだが、そういう気持ちを持って最後まで走ることをやめなかったことが、今の私にもたらしたものは大きい。先生は本当の教育者であり研究者だと思う。具体的なエピソードをここで挙げた方が、この言葉の真意は伝わりやすいのかもしれない。しかし、私と同じように小野ゼミという場で 2 年という時間を費やした 5 期や OB・OG の方々には、多くを語らずとも伝わると思う。先生は本当に本当の意味での教育者であり研究者なのだ。私はそんな先生の下で、マーケティングという学問と本気で向き合えることができて幸せだったし、そうすることができたことを心から誇りに思っている。先生は間違いなく私の恩師であり、小野ゼミは間違いなく私にとって最高の学び場であった。

5 期生 19 人との出会いは、先生との出会いとはまた別の意味で運命的で衝撃的だった。同じだけ年をとってきているはずなのに、19 人が 19 人それぞれ違ったずば抜けた何かを持っていた。そのずば抜けた何かは、多くの場合、私を感動させたが、時に驚くほどムカつかせたりもした。それ故に、彼らと過ごした時間を楽しかったという一言では簡単に片づけられない。

小野ゼミでの 2 年間で、5 期生 19 人と過ごした 2 年間として振り返るのならば、私は何とも言えない複雑な気持ちになる。言葉では表せないとはこのことだと思う。しかし、ただ 1 つ言えるのは、5 期のみんなと離れるのはものすごく寂しいということ。もうみんなと 1 つのことで議論して、ああだこうだ言い合うことができなくなるなんて、本当に寂しい。やっぱり、なんだかんだ言って、小野ゼミは私にとって最高の学び場であり居場所だったんだと思う。



高尾山で癒される著者（中央）

小野先生と 19 人のずば抜けた何かを持った仲間と過ごした小野ゼミでの 2 年間は、私にとって本当に運命的で衝撃的な 2 年間だった。